

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：13201
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520832
 研究課題名（和文）
 持続的社會に関する文化人類学的研究—エチオピア西南部の民族集團の生業分析から—
 研究課題名（英文）
 Cultural Anthropological Study of Sustainable Societies: An Analysis of Livelihoods
 Among Ethnic Groups in Southwestern Ethiopia
 研究代表者
 藤本 武 (FUJIMOTO TAKESHI)
 富山大学・人文学部・准教授
 研究者番号：20351190

研究成果の概要（和文）：

今日のアフリカは解決の困難なさまざまな問題に直面しているとされる。ただしその状況は地域や社会によって決して一様ではなく個々に精細な把握が必要である。本研究課題は社会の持続性という観点からエチオピア西南部の少数民族諸社会を対象に、主食作物の加工調理法の検討や、牧畜民と農耕民の間で発生してきた紛争の比較分析、そして半世紀以上にわたって進行してきたフロンティア地域における集落放棄の考察などを行った。

研究成果の概要（英文）：

Africa is often described as a continent bound with such problems as violence, poverty, corruption, etc. However, situations seem to differ greatly from countries to countries, from regions to regions, and from societies to societies, which indicates the necessity of a more detailed study at each scale. This study considers minor ethnic groups in southwestern Ethiopia in terms of the sustainability of societies by analyzing, as an ecological issue, local processing and cooking methods of a staple crop, and as social issues, recurring conflicts between herder societies and farmer societies, and the phenomenon of settlement abandonment in a frontier area which lasts over a half century.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文化人類学、文化人類学・民俗学

キーワード：持続的社會 生業変化 集落放棄 民族紛争 主食作物 山地社会 エチオピア

1. 研究開始当初の背景

小規模な地域・社会を研究する文化人類学の分野においてこれまで生業はさかんに分析されてきた。しかしその破綻や崩壊を扱った研究は多いわけではない。戦争研究

の難民の議論で時折言及されたり、地震や洪水など災害に関する研究で早魃と関連してとりあげられる程度である。何より従来の生業研究は平時におけるものがほとんどであり、安定性や環境適合性が強調される

傾向があった。

2. 研究の目的

研究代表者がこれまで調べてきたエチオピア西南部の民族社会における生業を概観してみると、過去に大規模な破綻（飢饉など）こそ経験していないものの、国家による政治支配や世界経済との接合など、外部世界との関係性が強まっていくなかで短期的な利益をめざした換金作物栽培が増大し、その過程でそれまで守られてきた森林の伐採や休耕期間の短縮に伴う土壌の流失、その結果引き起こされた水質汚染など、環境の劣化が徐々に進行しているのだった。

近年「持続的発展」の概念が重要となりつつあるが、アフリカの変化のなかには外部世界の影響が強まるなかで地域・社会の自立性が失われ、その環境を破壊し生業を破綻させる方向の、つまり持続性を減少させながらの短期的な「発展」も含まれているとみられる。アフリカ各地の小規模な地域・社会で起こってきている近年の変化について詳細な事例分析を積み重ねていくことがまず何より必要と思われる。

3. 研究の方法

研究代表者はエチオピア西南部の山地農耕民マロ(Malo)を対象に、これまで長期のフィールドワークを行い、民族の歴史や環境利用の動態について調べ、その成果を発表してきた。本研究課題においても現地調査と成果発表をともに継続して行うが、とりわけ成果のアウトプットに重点をおいた。

研究代表者の関心は農耕を主とした民族集団の生存戦略を解明していくことにこれまでであった。そのため国家支配や経済自由化の及ぼす影響、とくにその近年のものに関する理解が十分といえなかった。しかしこれまでに比べ、本研究課題は外部世界の及ぼす諸影響に細心の注意を払いながら調査を行う。調査方法は文化人類学のもっとも主要な調査方法である人びとからの聞き取りだけでなく、地方行政に保管されているアーカイブや農業省などの統計資料、国際機関の報告書などさまざまな文字資料も積極的に活用しながら進めていく。

計画段階では、研究代表者がこれまで調査を行ってきた山地農耕民マロ以外に低地農耕民コンソ(Konso)の社会においても本格的な調査に着手することを予定していた。コンソの地では土壌流失や水不足の問題が深刻であり、二十世紀後半たびたび食糧不足に陥り、緊急の食糧援助を政府に仰いできた。その一方でコンソの地域は1991年の新政権発足後、県と同等の特別行政区に指定され、観光開発が進んでいる。顕著な食糧不足がないものの国家との関係が脆弱

なマロとコンソはともにエチオピア西南部の農耕民であるが、両社会は対照的といえるほど異なっているのである。そのため、社会の持続性について検討する本研究にとり比較研究を行う際の格好の事例を提供するものと考えられたためである。しかしながら実際にエチオピアで現地調査を実施できたのは職場が変わり研究環境の安定した最終年度にわずか一ヶ月ほどであった。そのためコンソにおいて本格調査に着手するには至らず、マロでの調査も本研究期間に進展させることができたとは言いがたい。つまり調査は予定通り実施できたわけではない。

しかし当初の研究環境から研究代表者は調査の実施が困難であることは予想されたため、本研究課題では新規の調査の実施よりこれまでの調査にもとづいた成果の発表に重点をおくことを掲げていた。雑誌論文、学会発表、図書のいずれも決して十分なものではないが、一定の成果を出し、研究を進展させることができたのではないかと考える。

4. 研究成果

持続的社会について考察するのが全体のテーマであるが、本研究期間においては大きく二つのアプローチから行った。ひとつは生業をテーマとするものであり、もうひとつは社会環境を扱うものである。前者には主食作物の利用法を検討したものなどがあり、後者には牧畜民と農耕民の間で発生してきた紛争や定着農耕民社会の集落放棄を考察したものなどがある。以下その概要を報告する。

(1) 主食作物の利用方法の検討

エチオピア西南部で今日も主要な食糧源として栽培されるバショウ科の多年生作物エンセーテの加工調理法を社会との関係から検討を試みた。エンセーテに関しては、これまでその高い栽培収量や品種の多様性、多角的な利用法、野生から栽培へのドメスティケーションなどが主に議論されてきた。しかしエンセーテの食用利用の方法について十分な議論がなされてきていない。いくつかの先行研究でも指摘されているようにエンセーテの栽培方法は民族間に大きな違いがみられる。もっとも重要な主食作物として手間をかけて単作的にそして大量に栽培する民族がいる一方で、食用作物のひとつとして片手間に少量栽培するだけの民族もいるという具合である。じつはこうした栽培の仕方と対応するかたちでその食用利用の仕方も民族間でかなり異なる。エンセーテを多く栽培する民族はその根茎と偽茎を加工してそれらにふくまれる澱粉を長期間発酵させてから無発酵パン等に調理するのに対し、少量栽培する民族は掘り出した根茎をその日のうちに簡便に蒸し煮した

り蒸し焼きにして食べることが中心である。これらの民族間の加工調理のちがいはなぜみられるのか、また栽培の仕方と利用の仕方が各民族ごとになぜ対応した形でみられるのかを、研究代表者がフィールドワークを行ってきた山地農耕民マロの栽培利用の仕方から考察を試みた。マロのなかでもエンセーテを各世帯百本以上栽培する集落がある一方で、数本程度しか栽培していない集落もあるのであった。集約化の議論は従来生産(栽培)に関してなされてきたが、消費(利用)に関する適用可能な側面があることを指摘した

(下記〔学会発表〕③、〔図書〕②)

(2) 牧畜民と農耕民の間の紛争の比較考察

近年アフリカにおける小規模な紛争について環境変化による希少な資源をめぐる争いとする議論がある。牧畜民と農耕民の間の紛争では放牧地を確保しようとする前者と農地を拡大しようとする後者の土地をめぐる争いとされる。本論はエチオピア西南部の牧畜民と農耕民の間で発生してきた紛争事例について検討を行った。この地域では低地に暮らす牧畜民間の紛争が変動する環境下での資源確保や民族形成との関連で考察されてきた。ただし牧畜民の一部は1970年代から近隣の山地に暮らす農耕民を襲い、遠方の農耕民にまで対象を拡大してウシなどの財を略奪してきた。本論の分析から、紛争の背景には19世紀末にしかれた牧畜民と農耕民に対する国家の異なる統治策、国家支配のエージェントである入植者の私的関与、20世紀前半に主として農耕民になされた奴隷狩り、そして近年の自動小銃の流入など、外部からの地域への関与の問題が無視できないことが明らかとなった。じつは、他のアフリカの牧畜民と農耕民の紛争でも、紛争当事者間の土地などの資源をめぐる争いの背景に、国家や国際機関などによる開発政策が結果として争いを激化させていたり、過去の奴隷制が集団間の関係に影響をおよぼしているなど、資源紛争の構図におさまらない同様の問題が認められるのだった。小規模な紛争を対象に、その個別具体的な相を掘りさげて分析する人類学の紛争研究は、今日常套的になされがちな紛争説明に対して発言していくべきであるとともに、紛争後も長期に関わることで地域の紛争予防にむけた動きを支援するなど、独自の貢献を果たしていくことが求められる。

(下記〔雑誌論文〕②、⑤)

(3) 定着農耕民社会における集落放棄の分析

エチオピア西南部の山地農耕民マロは、東隣のゴファから移住してきた人びとを主体

にして数世紀前に形成され領域を広げてきた元王国(マロ王国)の民である。19世紀末にエチオピア帝国に編入されると人びとは移住を制限され、高地では人口が増え、定住性も高まった一方、低地では周辺から集落が放棄され、人口が流出した。定着農耕民のマロにとって集落の放棄は本来極力回避すべきものだが、実際はその流れは止まることなく今日に至る。本稿は集落放棄がもっとも広範に発生してきたその西部域を対象に分析を行った。時期により要因は異なるものの、集落放棄はほぼ一定のペースで発生していた。長期におよぶ不安定な治安や交易路の変化に伴う経済的な衰退が関係するとみられる。かつて西部域は拡張過程にあったマロ王国が新たに領域としたフロンティアの地だったが、エチオピア編入後、その統治の末端に組み込まれ、治安が不安定になると、多数に分散していたその小集落は次々放棄され、近隣のより高所に形成された集住的な大きな集落に収斂されてきた。同時に相当数の人たちは故地のゴファへ移っていった。国家編入を契機に人びとの移動の流れは反転してきた。

(下記〔雑誌論文〕①、〔学会発表〕①、②)

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計6件)

- ① 藤本武、フロンティアの変容：エチオピア西南部の山地農耕民マロの集落放棄に関する考察、アフリカ研究、査読有、80、2012(印刷中)、全13頁。
- ② 藤本武、アフリカにおける牧畜民・農耕民紛争：エチオピア西南部の事例分析、文化人類学、査読有、75(3)、2010、347-370。
- ③ 藤本武、生業の破綻をいかに防ぐかーエチオピア西南部の山地農耕民マロ(Malo)の事例からー、JANES ニュースレター、査読無、18、2010、19-21。
- ④ Takeshi Fujimoto (藤本武)、Taro [*Colocasia esculenta* (L.) Schott] Cultivation in Vertical Wet-Dry Environments: Diversity Maintained by Mountain Farmers' Techniques in Southwestern Ethiopia、Economic Botany、査読有、63(2)、2009、152-166。DOI: 10.1007/s12231-009-9074-7
- ⑤ Takeshi Fujimoto (藤本武)、Armed Herders, Unarmed Farmers, and the State: An Analysis of Violent Conflicts in the Middle Omo Valley with Reference to the Cases in Malo, Southwest Ethiopia、Nilo-Ethiopian

Studies、査読有、13、2009、63-77.

- ⑥ 藤本武、エチオピア西南部の少数民族マロにおける伝統的宗教の諸相：精霊・呪薬・邪視信仰を中心に、査読無、20、2009、126-147。

[学会発表] (計 8 件)

- ① 藤本武、集落の消滅をめぐる人類学、第 121 回北陸人類学研究会 (文化人類学会北陸支部例会)、2011 年 11 月 26 日、石川四高記念文化交流館 (石川県金沢市)
- ② 藤本武、アフリカ山地農耕民の集落放棄：エチオピア西南部マロの事例、日本アフリカ学会第 48 回学術大会、2011 年 5 月 21 日、弘前大学 (青森県弘前市)
- ③ 藤本武、調理法と社会の関係についての一試論—エチオピア西南部のエンセーテ栽培民の比較考察から—、共同研究会「歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化」、2010 年 12 月 4 日、東京外国語大学アジア・アフリカ研究所 (東京都府中市)
- ④ Takeshi Fujimoto (藤本武)、Socio-Ecological Implications of Enset (*Ensete ventricosum*) Starch Fermentation in South-West Ethiopia: An Anthropological Study、Oxford Symposium on Food and Cookery “Cured, Fermented and Smoked Foods”、10 July 2010、Oxford, United Kingdom
- ⑤ 藤本武、有毒イモを喰らう—エチオピア西南部におけるテンナンショウ類の採集利用と半栽培の事例—、日本アフリカ学会第 47 回学術大会、2010 年 5 月 30 日、奈良県文化会館 (奈良市)
- ⑥ Takeshi Fujimoto (藤本武)、Hulled Barley (*banga*) and Naked Barley (*murk' a*) in Malo, Southwestern Ethiopia: Cultivation Techniques, Uses and Recent Changes、the 33rd Annual Meeting of the Society of Ethnobiology、7 May 2010、Victoria, British Columbia, Canada
- ⑦ Takeshi Fujimoto (藤本武)、Recent Agricultural Changes in Malo, Southwestern Ethiopia: Regarding Crop Diversity and Labor Organization、the 17th International Conference of Ethiopian Studies、4 November 2009、Addis Ababa, Ethiopia
- ⑧ 藤本武、アフリカにおけるタロイモ栽培：エチオピア西南部マロの事例からの考察、日本アフリカ学会第 46 回学術大会、2009 年 5 月 23 日、東京農業大学 (東京都世田谷区)

[図書] (計 3 件)

- ① Sam Maghimbi, Isaria N. Kimambo, and Kazuhiko Sugimura (eds.)、Dar es Salaam University Press、Comparative Perspectives on Moral Economy: Africa and Southeast Asia、2011、pp. 252-272.
- ② Helen Saberi (ed.)、Prospect Books、Cured, Fermented and Smoked Foods、2011、pp. 106-120.
- ③ Serena Heckler (ed.)、Berghahn Books、Landscape, Power and Process: Re-evaluating Traditional Environmental Knowledge、2009、pp. 156-182.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤本 武 (FUJIMOTO TAKESHI)
富山大学・人文学部・准教授
研究者番号：20351190

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者